



津波の2時間後

校 門



震災後、自然に祭壇となった。

アッセンブリ ホール (多目的室)



教 室



元々は2学級で使用。学級減により壁を外し、半分に机を並べ、半分はワークスペースとして広々と使っていた。(1階は1・2年生)

中 庭



渡り廊下



体 育 館



野外ステージ



コンクリートの反響板は倒れている。
壁画にある「未来を拓く」は大川小の校歌のタイトル。



3.7km

海から大川小までの距離

1.1m

大川小の海拔

校門脇にあった碑、
海拔1m12とある



108名

当時の全校児童数
(校庭にいたのは77〜8名と
言われている)

74名

犠牲になった児童数
(死亡70、行方不明4)
2026年7月現在

10名

犠牲になった教職員数
(校庭にいた11人中)

9度

毎年3月にシタケ栽培の
体験学習を行っていた
大川小裏山の傾斜



51分

14:46 (地震発生) から
15:37 (津波到達) までの時間
津波で止まった時計



1分

津波から避難した時間
山ではなく川に向かった

8.6m

大川小を襲った津波の高さ
(海拔9.7m)

2階教室の天井に
津波の跡がある



150m

先頭の子が
避難開始から移動した距離

宮城県石巻市立大川小学校

1873 (明治6) 年 桃生郡釜谷小学校として開校

1985 (昭和60) 年 大川第一小学校と大川第二小学校が統合され
大川小学校となり、現在残されている校舎が完成

2011 (平成23) 年3月11日 東日本大震災の津波で被災

2018 (平成30) 年3月31日 閉校

2026.8

町がありました
生活がありました
いのちがありました
子どもたちが
学び遊びました

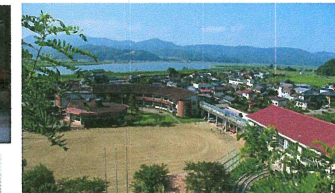
大川小にお越しの皆様へ

ここは多くの命が波に飲まれていった場所です。
悲しみ、後悔、恐怖が渦巻く場所です。でも、
できれば多くの皆さんに向き合ってほしい場所
です。

大好きな大川、大好きな大川小学校を走り回る
子どもたちをイメージしてください。目を凝らし、
耳を澄ませば、見えてきます、聞こえてき
ます。

失われた輝きを伝えるのは、時間が経つほどに
難しくなりますが、とても大切なことでもあり
ます。慰霊も検証も防災もそこが始まりです。
伝え続けることで、思い出も命も輝き続けると
思います。

あの日のこと、あの日までのこと、あの日からの
こと、そして、これからのことをみんなで…。



大川伝承の会

facebook.com/ookawadensyo/



震災遺構大川小学校ガイド

korekoko.blogspot.com/p/blog-page_21.html



2011年3月11日 14時46分から15時37分まで

学校管理下に 70数名の児童 11名の教員

14:46 地震発生 14:52 大津波警報 15:37 津波到達

14:46 地震発生 震度6 約3分間

校庭避難 校舎から出る際、先生が「津波が来る、山に逃げるぞ」と声をかけ山に向かった児童もいたが、まずは整列することになった。

14:52 大津波警報 かつてない緊迫した警報。スクールバスは会社と無線でやりとりしながら、すぐ出られるように待機。

15:00頃 地域の人や迎えに来た保護者が山への避難を導言。「山に逃げよう」と訴えた児童もいた。

15:25~30 市の広報車が高台避難を呼びかけ通過。

15:32 津波が富士川堤防を越流。

15:36 移動開始 山ではなく三角地帯（橋のたもと）へ向かった。民家裏の細い道を通ったが行き止りだった。

15:37 学校に津波到達 橋に流木やがれきが堆積し一気にあふれた。その後、陸を遡上した津波も到達し校庭で渦を巻いた。

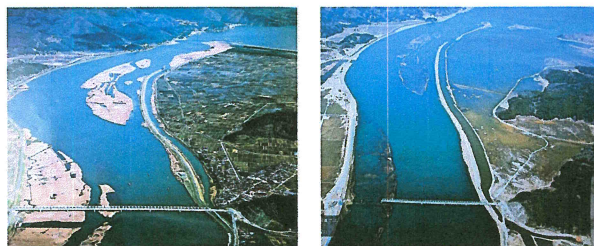


■ 救う方法はあった。

体育館裏の山は傾斜が緩く、低学年でも容易に登れます。シイタケ栽培の体験学習も行われていました。5分あれば入釜谷方面へ向かい、植樹を行っていた山（バットの森）への避難も可能。地震による倒木はなく、スクールバスも方向転換を済ませ待機していました。

■ 校庭に集合し点呼。津波到達直前まで待機。

断続的に揺れが続き、警報が響く中、校庭待機が続き、たき火の準備も始まりました。学校の周りには町があり橋も川も見えませんが、津波はどんどん迫っていました。



せき止めた分、津波の威力、高さは大きくなった。橋は約4分の1が流失、堤防も決壊した。



2階の教室

ガレキに埋もれた校舎

■ 事前防災の大切さ

「2003年からの30年以内に99%以上の確率で大地震と津波が発生」という県の想定をうけ、市教育委員会は各校に防災体制の見直しを再三にわたり指示しました。

大川小のマニュアルには「近隣の空き地・公園に避難」と書いてありましたが、近くには空き地も公園もありません。意思決定の遅れにつながりました。「逃げるかどうか」「どこへ逃げるか」をしっかり決めていた学校は、津波のだいぶ前、結果的に津波が到達しなくても、念のために避難しました。

■ 自分ごとにできるかどうか

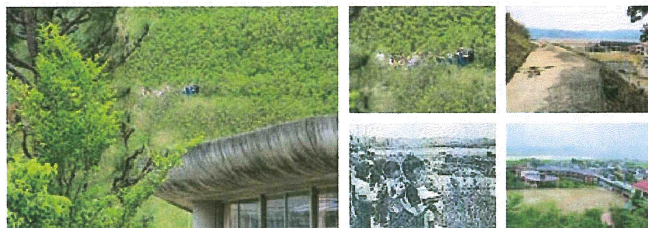
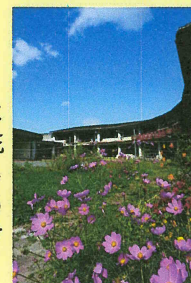
一方で、備えが不十分で避難しなかったが、津波が到達しなかったので助かったという学校も少なくありません。特別な場所で起きた特別な出来事ではないのです。裁判（2018.4判決）で問われたのは、当日の判断ミスではなく事前の取組です。防災は「その時をどんな状態で迎えるか」です。平時の備えで命を救うことが出来ます。今すぐ、自分に置き換えてください。

■ シンプルに丁寧に、命を真ん中に

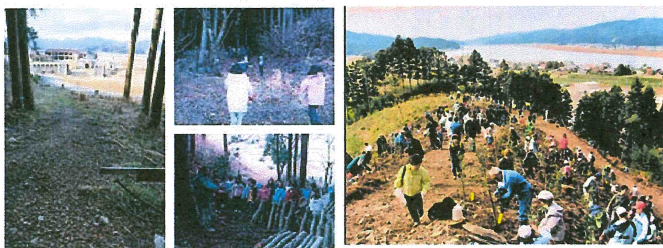
学区内に海があり、川のそばに建っている学校のマニュアルに具体的な避難場所を一行書き込むために必要なことはなんでしょう。そんなに複雑なことでしょうか。報告書や通達が増えるだけでは本末転倒です。それらは時に命を見えなくします。本当に恐ろしいのは津波ではなく、大事なものを真ん中にできないことです。同じようなことが私たちの周りにはないでしょうか。

じっとしゃがんでいた校庭はどんなに寒くて、怖かったでしょう。黒い津波を見たとき子どもと先生は何を思ったでしょう。事実に向き合うことは容易ではありません。

しかし、多くの皆さんがここに足を運びます。祈り、考え、花を植え、こうして震災遺構として整備されました。これからも集い学ぶ大切な場所であり続けますように。



校庭裏の山 崩れないように土留めをし、コンクリートのテラスのようにしている(5~6m幅で70m以上)。低学年の授業でも使っていた。ここから撮影した写真も多数。



体育館裏の山 2009年まで毎年3月にシイタケ栽培の体験学習が行われていた。

バットの森 全校児童でアオダモの木を植えた